

1、旧約聖書は「亡国」を経験した民族が残したものである。北イエラエル王国は前722年アッシリア帝国によって、続いて南王国ユダハ前586年のバビロニア帝国によって滅ぼされた。なぜ、滅ぼされたのか。歴史家、特に「申命記派歴史家」（申命記を含め、ヨシュア記から列王記までの歴史書〔ヘブル語聖書では前の予言者〕という、これをまとめた編集者）は、滅びは、神の定めたものであり、それには服する以外に道はないという厳しい歴史観を示した。少なくとも滅亡の歴史を民族は忘れることはなかった。滅亡をもって、神が歴史の意味を知らせるとは、なんと大胆な事であろう。

2、日本の国民性に希薄なものは歴史意識である事を、我々日本人は本当にかみ締める必要がある。アメリカの歴史家ジョン・タワーはかつて「敗北を抱き締めて」（2001岩波書店）という名著で、日本人は太平洋戦争の敗北の意味を本当に考えたであろうかと述べた。精神性を含めて「天皇の統治」が何故現在も続くのかと語ってる。スポーツの会場ではルール違反であるが、日本との試合の場で、「歴史を忘れる民族に未来はない」とソウル市内サッカー場で横断幕が掲げられた（7/29東京新聞）。虐げられた側は歴史を忘れない。アジアへの侵略戦争（太平洋戦争）でのアジアへの加害者性を忘れる事があってはならない。

3、今日の聖書テキスト「サムエル記上」は王国の樹立史。サムエル誕生、少年時代、シロの神殿や、ペリシテ人との戦いの様子などの物語。シロの聖所はエフライム、マナセ、ベニヤミンの部族が同盟を結びペリシテに対抗する拠点であった。シロの祭司と言えば大変な地位であった。エリはそこに40年間、忠実にその任務を果たした立派な指導者。しかし、エリにも泣き所があった。子供のホフニとピネハスはやはり祭司の地位にあったが、親の地位を利用して相当な悪事を働いた（2/12-17）とある。もちろんエリの耳には入っていた。エリは「人は主に罪を犯したら、誰が執り成してくれよう」（25）と息子たちを諫めた。だが、彼らは聞かなかった。彼は息子たちの教育には失敗したという傷を負っていた。彼らはペリシテとの戦いで戦死した。歴史家は神の裁きと見ている。

4、しかし、エリという教育の失敗者の許に、将来のイスラエルの歴史の基礎を担ったサムエルの養育、神殿での教育が託されていた。「一方、少年サムエルはすくすくと育ち、主にも人々にも喜ばれる者となった」（26）。「一方」とは、教育の失敗者の現実とは平行してという事である。サムエルがエリにその教育が委ねられているとは、なんと言う神の大胆さを思う。

5、我々には一人一人、神の業が託されている。しかし、それはエリのような意味ではないであろうか。己を誇ってはならない。神の大胆さにこそ信頼をおいて生きたい。

「平和憲法」がこの鈍い民に託されている意味を噛み締めた。今日は平和聖日。